

---

恋

空暗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋

### 【Nコード】

N8585D

### 【作者名】

空暗

### 【あらすじ】

大きな力を持った彼と、その彼の力を狙う者からの使者の彼女。心の中に闇を持つもの同士の恋

## プロローグ（前書き）

えーと、この小説は1話1話かなり短いです  
そっいうの苦手な人はご遠慮ください

## ブローグ

目を開けて、もう一度、光を見て

そう、心の奥では願ってる

目を閉じて、暗い闇の世界へ落ちていけ

そう、心にも無い言葉をあなたに吐く

ごめんなさい

ごめんなさい

もう一度、あなたの目を見たい

もう一度、私を見てほしい

ごめんなさい、ごめんなさい

最後に見たあなたの目の色は、とっても綺麗で悲しかった

ああ、ごめんなさい

過去はやり直せないってこんなに辛いことだったんだって、初めて知った

あなたを闇に落としたのは私です

そしてあなたがその闇の中で信じてくれているのも私です

ああ、何て酷い人だろう

ああ、何てことをしてしまったのだろう

ごめんなさい

ごめんなさい

あなたはその闇の中で、何を思っていますか？

あなたは どうして、私を信じているのですか？

・ 出会い

彼と出会ったのは偶然に見せかけた必然から

初めて会った私を彼は疑いもせずに優しくした

初めはどうでもよかったそんな彼の優しさを、意識するようになったのはいつからだろう？

これから私がする行為に、恐怖し始めたのはいつからだろう？

何て罪深い男だろう

何て罪深い女だろう

彼のことを恨みながらも、私は私自身も恨んだ

私は餌、彼が獲物

餌はなんの感情も無く獲物を釣るもの

そう、思っていた

大いなる力を持っている彼



地獄の王はその力を欲した

かつて自分を滅ぼした神々に報復するために

私は餌として汚れた翼を隠し、綺麗な女性へと変化する

白い肌に大きな翡翠色の目

薄い金色の髪

誰が見ても美女だと言われるような完璧な美しさ

簡単に、彼も釣れると思っていた

「どうしました？」

わざと見つけさせるように仕込んだ罠に、彼は見事に引っかかった

私は困った顔を作り、彼がよく通る道で待っていた

足を捻挫させて

見事に引っかけた彼を内心嘲笑い、私は顔に安堵の色を浮かべる

「捻挫……ですか、家、何処ですか？」

まったく邪のない声、単に“困っている人”を助けたいと願う声だ

私の傍らに彼は跪き、足に手を添える

暫くすると、足の痛みが消えた

「俺、ちょっと妙な力あるんです、痛みは消しましたが捻挫自体が直るのはもう少し後です。家に送っていきますから道教えてください」

そういつて、彼はニッコリ微笑んだ、なんて馬鹿な男だろう

「ありがとうございます、でも大丈夫です、もう少ししたら直るんですよ？これ以上あなたに迷惑は掛けられませんから、私はもう少し休んでから一人で帰ります」

あんまり最初からベツタリしていると嫌がられるし彼の気を引けない

心の奥まで支配するにはもう少し引かなければ

容姿がここまで良い女だ、男なら放っておかないだろう

「そうですか、では気を付けて、これお守りです」

あっさりと傍を離れ、手に小さな玉ぎよくを渡す

こんな対応されたの初めてだ、いつもなら男は無理矢理でも付いてくる

それに親切にしてやったのにこんなに素っ気なくされたら誰だって嫌な顔の一つはする

だがこの男は、渋りも嫌な顔もせずにお守りと称する物を渡して去っていく

……………これは時間が掛かりそうだ



・興味

男の容姿は白銀色の髪に深紅と深青のオッドアイ、細身で長身、顔は整っている

そこの女ならほいほいついていきそうな容姿

絶世の美男子とも言える

「これなら簡単には引っかかりそうにない、押してみるか……」

「いんにちは」

出来るだけ優しい声を出し笑いかけると、彼は少し驚いた顔をして  
こんにちはと返す

「この前は良くしていただいて有り難う御座います、これ、お守り  
返しますね」

ただお礼を言いに来る、というの前に冷たくした分おかしいので、  
渡しされた玉を持ってきた

「ああ、わざわざすみません、捻挫、直ったみたいでよかったです」

そついつて彼は早々と玉を受け取り、話を終わらせようとする

変な男だ、優しくしといて

少し黙って彼を観察する

今はまだ朝早い頃で、つい先ほど出てきた太陽が眩しく光っている

彼はその日の出を見に来た様で、話をしている最中も殆どこちらを

みなかった

男という生物にしては変な人、目の前に美しい女性がいるのに毎日  
見れる太陽をみるなんて

「ところであなた、家は何処ですか？こんなに深い森の中に女性が  
一人で来るなんて危ないですよ」

相変わらず陽を見ながらの忠告だ

「家がこの近くなんです、最近北から流れてきたので近くを探検し  
てるんです」

色気を含んで言ってみたが、やはり隣の男は目もくれない

「そうですね、大変ですね、ですがこの森結構野獣多いですから探  
検もそこそこにしないといたほうがよろしいですよ」

また無視だ、こいつは本当に男なのか？

「はい、気を付けます、ありがとうございます」

そう笑顔で言ってみたものの、やはり男は興味を示さなかった



・些細な変化

あれから私は毎日彼の所へ行っている

特に何か話すわけでもなく、ただジッと彼をみているだけだ

まったく進歩していないのだが、何故か苛立ちはしなかった

いつもの様にまだ薄暗い時間の森を歩き、彼の家へと向かう

今日は二人分の弁当を持つての出勤だ

自画自賛になるが、本当に美味しそうな臭いがする

これで少しは興味を示してもらえるかもと、気分を良くしながら小走りで森をかけていた

突然草むらから何か黒い動物が飛び出した

突然の出来事で足が動かず、攻撃に備えている体制をとった

「っ……、大丈夫ですか？」

少し慌てたような彼の声、すぐ傍にいる

痛みも何も感じないので、目を開けて強ばった体を緩ませる

目の前には彼の顔があった

「危なかったんですよ？そんな美味そうな臭いのする餌ぶら下げて歩かないで下さい、今日は小物だったから良かったですが、大物だったらあなたもう死んでますよ？」

本当に安心したように、大きな溜息を付きながら軽く抱きしめられる

少しは関係が進歩したようだ

弁当を餌と言うのは許せないが

ただ勢いで抱き締めたただだったのか、彼は慌てて手を離し、腕一個分の差を開ける

少し離れた事で、やっと彼の異変に気づけた

腕に酷い怪我をしていた

狼の噛み跡、と言うのが一番正しい説明だ

深くまで惨たらしい傷がある

思わず素で心配してしまい、口に手を当てる

そんな私に気付いたのか、彼は慌てて腕を隠す

「大丈夫ですよ、結構浅いし」

嘘だ、全然浅くない、すごく深い

いいから早く行きましょう、また狼の相手するのは嫌ですから、と少し強引に私を引っ張りいつも彼が日の出をみる丘へ行った

「大丈夫ですって、こんなの掠り傷です」

「絶対駄目！あなたは私のせいで怪我をさせてしまったの、原因の私があなただの怪我の責任を持つのは当たり前でしょ？」

こんなやり取りが数分続き、やっと彼は手当を許可した

「勿体無いですって……本当に大丈夫なんです！！」

初めて彼が大声を出したのはこのときだった

彼の家には手当とする物が全く無く、仕方ないのでスカートを破こうとしたのだ

せめて洗って包帯位は巻いてあげたい、そんな私の望みが全くわからなかったようで、彼は私がスカートを破こうとするのを必死に止めていた

「いい加減にしないで！！人の怪我を散々心配する癖にあなたは自分の怪我はどうでも良いのね！！それじゃあ優しくしてもらった人が悪いみたいじゃない！！」

私は怒鳴った

こんな人を見たのは初めてだ

なんて馬鹿で優しい人なんだろう

助けてもらった人の気持ちを全然わかってない

彼はかなり驚いたようで、それからすみませんと一言謝り、あとは私に任せてくれた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8585d/>

---

恋

2010年10月15日20時52分発行